リカードの価値理論と分配理論 (2)

吉　澤　昌　恭

Ⅲ　リカードの分配理論

§7　富と価値

(1)富と価値の区別

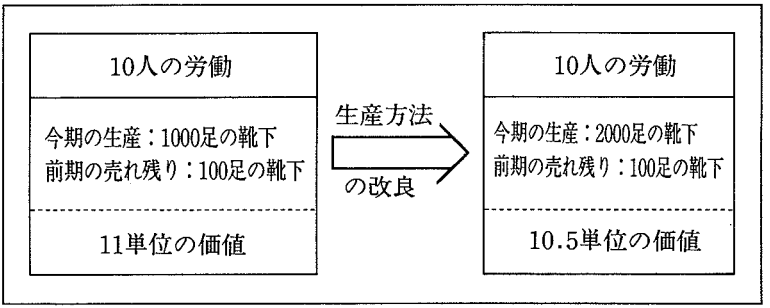
リカードの分配理論に進む前に，尚2つの点についてふれておくのが有益であろう。まず第1が，価値 (value) と富 (riches) の区別である(『原理』第20章)。リカードは，「製造業における100万の人の労働は，つねに同一の価値を生産するであろう」[20]と述べている。商品の価値はそれの生産に必要な労働量に応じて決る，という立場が採られている以上，それは当然であろう。しかし，同一の労働量は常に同一の富(リッチズ)を生み出す，というわけではない。例えば，新しい機械の発明等によって生産方法が著しく改良された場合には，同一人数の労働者が従来以上の数量の財貨を生産し得るようになるからである。

さて，生産方法の改良が起った場合の，商品の総価値については若干の説明が必要であろう（図2参照)。今，10人の労働者によって1000足の靴下が毎期生産されているとしよう。その内の900足のみが当該期間に売られ，残りの100足は在庫として次年度へ持ち越されるものとする。この場合，各期毎に存在する靴下の総数は1100足であり，労働を尺度としてその価値を測るならば，1100足の靴下は11単位の価値を持つことになる。

---

(20) Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, p. 273.(『経済学および課税の原理』，315頁)。

図2



靴下製造方法が著しく改良され，10人の労働者が2000足の靴下を生産し得るようになったとしよう。改良直後の期間に存在する靴下の総数は2100足となり，大幅に増加しているが，その総価値は10.5単位となり，0.5単位だけ減少することになる。なぜなら，改良前に生産されて在庫として持ち越されてきた100足の靴下の価値が半減するからである。

(2)生活水準 vs. 相対的分前

分配理論に進むに先立ってふれておくべき第2の点は，リカードの関心は富（リッチズ）にはなく，専ら価値に，しかも，地主・資本家・労働者への価値の分配にある，ということである。

穀物の生産が行われていて，その最終生産物は，労働者・地主・資本家へ，それぞれ25単位，25単位，50単位という割合で分配されていた，と仮定しよう[21]（表5参照）。今，生産方法の改良があって，穀物生産高が2倍になり，200単位の穀物は，労働者・地主・資本家へ，それぞれ44単位，44単位，112単位という割合で分配されるようになったとしよう。この場合，資本家のみならず，労働者や地主も従来以上の富を獲得するに到り，その生活水準は上昇すると考えられるが，労働で測った価値でみる限りは，資本家の取り分のみが増大し，労働者と地主の取り分は減少しているのであ

(21) Ricardo, D., *ibid.*, pp. 49-50.（同上，55－57頁）。

表5

旧生産方法	労働者の取り分　25 地主の取り分　25 資本家の取り分　50	
新生産方法	労働者の取り分　44 地主の取り分　44 資本家の取り分　112	労働者と地主〈より多くの富の取得／よりわずかの価値の取得〉 資本家〈より多くの富の取得／より多くの価値の取得〉

る。つまり，「賃銀と地代は低下し，利潤は上昇した」[22]というわけである。

§8　分配理論の中心命題——地代・賃金・利潤の相対的シェアの変化

いよいよ，「地主，資本家，労働者という3階級への，大地の生産物の分配を左右する法則」についての，リカードの主張を論じることが可能になった。この節では，①地代・賃金・利潤とは何であるか，についてのリカードの説明，②社会の進歩につれて，地代・賃金・利潤の相対的シェアがどのように変化してゆくか，についてのリカードの説明，そして③リカードの理論がいかなる政策上の含意を持っているかの検討，という順序で議論を進めてゆくことにしたい。

(1)地代・賃金・利潤

地代については，§3(2)で論じてあるので，ここでは簡単にすますことができる。リカードによれば，①土地の有限性，②地質の差，③人口増加に由来する劣等地の耕作，といったものが地代発生の原因であり，劣等地耕作に際して生ずる借地人の間の競争が利潤の減少を生み，その帰結として優等地での地代を生むのである。更に，大地の生産物の価格は実際に耕作の為されている最劣等地（ここでは地代はゼロになる）でのコストによって決ってくるので，「地代は商品価格の一構成部分として加わり得ない」

(22) Ricardo, D., *ibid.*, p. 50.（同上，57頁）。

ということになる。

賃金についての議論へと進むことにしよう。リカードは，労働の自然価格と市場価格とを区別する。[23] 労働の自然価格とは，①人口を定常的状態に保ち，且つ②労働者に，食物・必需品・および「慣習から彼にとって不可欠となっている便宜品」の購入を可能にする価格である。それに対して，労働の市場価格とは，労働に対して実際に市場で支払われる価格である。

さて，労働市場の状況次第では，即ち，労働力需要が労働力供給を上回り続ける限りは，「労働の市場価格」は「労働の自然価格」を上回り続けることができ，労働者の生活水準は改善されるであろう。しかし，リカードは，このような状態は常態ではないと考えている，或いは考えたがっているように見える。そこで登場してくるのが，マルサス流の「人口理論」である。

「労働者の境遇が繁栄して幸福になり，彼が生活の必需品と享楽品のより大なる割合を支配することができ，またそれゆえに健康で多数の家族を養育することができるのは，労働の市場価格がその自然価格を上まわるときにおいてである。しかしながら，高い賃銀が人口の増加に与える奨励によって労働者の数が増加するときは，賃銀はふたたびその自然価格にまで低下し，そして時には，反動のために実際それ以下に低下することもある。[24]」（傍点，吉澤）

§2で，「リカードは，摩擦を無視し，長期の状態が直ちに実現されるかの如き仮定の下で議論を展開している，とオブライエンは見ている」と述べておいた。リカードが賃金を説明するに際して「人口理論」を適用するやり方こそ，まさにその典型と言うことができる。マルサス以上にマルサス的な「人口理論」（オブライエンはこれを the Mark I version of

(23) Ricardo, D., *ibid.*, pp. 93-94.（同上，109-110頁）。

(24) Ricardo, D., *ibid.*, p. 94.（同上，110頁）。

Malthus's population mechanism[25] と呼んでいる）を用いることによって，リカードは，労働の市場価格はほとんど常に労働の自然価格の水準にある，と想定しているように見える。もし，こうした想定が取り除かれるなら，リカード分配理論の簡潔性は大いに損われてしまうであろう。

リカードによれば，利潤とは，限界耕作地（そこでは地代はゼロである）での生産物から賃金を差し引いた残余である（図1参照）。彼は利潤を次のように定義している。

「土地の生産物のうち，地主と労働者とが支払を受けた後に残る分量は，必然的に農業者に属し，彼の資本（ストック）の利潤を構成する。」[26]

「利潤＝残余」といった消極的定義と，「ある商品の価値は，その商品の生産に必要な労働の量によって決まる」という命題とは裏表の関係にある，と言わねばならない。リカードが労働価値説を100％支持しているかどうか，議論の余地はあろうが，彼が労働価値説に相当肩入れしていることも事実である。もしそうだとすれば，資本の生産性に基づいた利潤論の展開をリカードに期待することは難しい，と言わねばならない。

(2)地代・賃金・利潤の相対的シェアの変化

リカードにとって，社会の進歩 (progress of society) とは富と人口の増加を意味している。（富については§7を参照されたし。）さて，リカード分配理論に於いては，人口増加がとりわけ重要であり，それは彼の分配理論で梃子（てこ）の役割を果している。人口が増加すればより劣質な土地の耕作が行われるようになる，とリカードは言う。

---

(25) O'Brien, D. P.: *The Classical Economists,* p. 38.

(26) Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation,* p. 112.（『経済学および課税の原理』，131頁）。

「人口が増加するたびごとに，一国は，その食物供給の増加を可能にするため，より劣質の土地に頼ることを余儀なくされる」[27]

この「より劣質な土地の耕作」という要因を軸にして，リカードの分配理論は展開されてゆくのであるが，それを論ずるに先立って，次のことを指摘しておきたい。それは，彼には，「貧民のみから成る人口の多い国」と「豊かな人々によって構成されている人口の少い国」のいずれがより進歩した国か，という問がないということである。「高い賃銀が人口の増加に与える奨励」によって，労働の市場価格がほとんど常に労働の自然価格に一致している，と考えているような人間には，上のような問は生じて来ようがないであろう。

しかし，こうした推論の基礎を成す，マルサス流の人口理論には明らかな欠陥がある。筆者は『市場機構と社会保障制度』（法律文化社，1989年）の第2章で，その欠陥について論じておいたので，そちらを参照されたい。

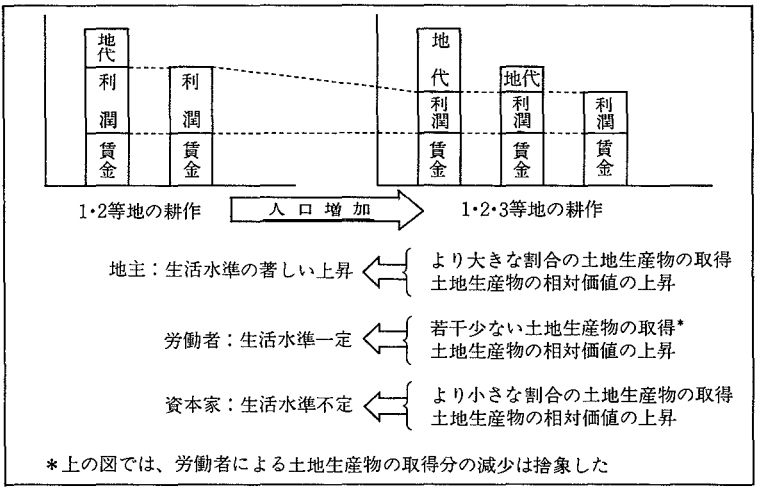
さて，人口増加の結果として，より質の劣った土地が耕作されるようになれば，地主・労働者・資本家への生産物並びに（投下労働量で測った）価値の分配はどのように変化してゆくであろうか？図3を参照されたい。地主は二重の意味で利得を得る。[28] 一方で，地主は土地生産物のより大きな割合を取得するに到り，しかも他方で，この土地生産物の他商品に対する相対価値は上昇するのである。というのも，より劣質の土地の耕作が行われたために，同一量の収穫を上げるのにより多量の労働投下が必要となり，投下労働量で測った土地生産物の価値は上昇するのに対して，生産の難易度に変化のなかった他の商品の価値は元のままに止まるからである。

労働者の地位はいかなるものとなるであろうか？そもそも，リカード体系に於いては，the Mark I version of Malthus's population mechanism によって労働者の生活水準一定と想定されているのであるから，賃金も一

(27) Ricardo, D., *ibid.*, p. 70.（同上，83頁）。

(28) Ricardo, D., *ibid.*, p. 83.（同上，98頁）。

図3



定だということになろう。しかし，厳密に言うなら，土地生産物で測った賃金は若干低下することになる。[29] なぜなら，労働者の消費する土地生産物以外の商品（例えば，工業製品）の相対価値は低下するのであり，一定の生活水準を維持することは，従来よりも若干少ない「土地生産物で測った賃金」によって可能になるからである。

資本家は，より小さな割合の土地生産物を取得するが，土地生産物の相対価値は上昇するので，資本家の生活水準が上昇するか下落するかは，一義的に決定できない。

(3)政策上の含意

より質の劣った土地の耕作につれて，生産物中の利潤の割合は低下してゆく，つまり，農業での利潤率は低下してゆく，というのがリカードの基本的な主張のひとつである。しかも，§4～§6で見た如くに，農業以外の分野はリカードの視界から取り除かれてしまい，農業での利潤率は一般

(29) Ricardo, D., *ibid.*, p. 102.（同上，119頁）。

的利潤率を代表するものとして扱われる。もし，利潤率の低下が進むなら，やがて，資本蓄積が停止し，経済は停滞状態に陥るであろう。遅かれ早かれ経済は停滞状態にたち到らざるを得ないのではあるが，穀物輸入を自由化することによって，こうした停滞状態の出現を少しでも遅らせることは可能である。従って，穀物輸入の自由を認めよ。以上が，リカードの分配理論が穀物貿易に関して持つ，政策上の含意である。

§3(1)で，「試論」にある次のような文章を引用しておいた。

「資本にたいする一般的利潤は，食糧の交換価値の低下だけによって高められるものである。」[30]

『原理』の「利潤について」という章の終りに近い部分に，次のような文章がある。

「一国の面積がどのように広くても，土地の品質が貧しく，また食物の輸入が禁止されているところでは，ごくわずかの資本の蓄積も，利潤率のはなはだしい減少と地代の急速な上昇とを伴うであろう。これと反対に面積は狭いけれども肥沃な国は，とくに食物の輸入が自由に許されるなら，多くの資本を蓄積しうるが，いちじるしい利潤率の減少も，いちじるしい地代の増加もないであろう。」[31]

以上の2つの引用文を比べることによって，「試論」での問題意識が『原理』でも受け継がれている，ということが明らかになろう。

---

(30) Ricardo, D.: *The Works and Correspondence of David Ricardo,* Vol. IV, p. 22.（『後期論文集・1815-1823年』デイヴィド・リカードウ全集第4巻，29頁）。

(31) Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation,* p. 126.（『経済学および課税の原理』，148頁）。

§ 9　製造業への言及

「試論」も『原理』も，共に，農業中心の1.5部門モデルである。しかし，『原理』は，「試論」に比べると，はるかに大きな著作であり，『原理』に於いては製造業への言及も幾つか為されている。そこから，製造業についてのリカードの若干の考え方が浮び上がってくる。

さて，リカードの分配理論に於いて，農業での収穫逓減が中心的な役割を果している。勿論，彼も，農業上の改良が起り得る，ということに気づいており，それに言及もしている。彼は，農業上の改良には2種類のものがある，と言う。[32] 一方には，土地の生産力を増大させる改良があり，これには，より巧妙な輪作，より優れた肥料の選択などが含まれる。そして他方に，農具の改良，農耕用の馬の使用上の節約，獣医学の進歩といった，より少ない労働を用いての生産を可能にする改良がある。しかし，地代・賃金・利潤の相対的シェアの変化の説明に際しては，こうした農業上の改良に言及されることはなく，農業での収穫逓減は当然の前提であるかの如くにして議論が進められている。

それに対して，リカードは，製造業に対しては，収穫一定或いは収穫逓増を想定しているように見える。製造業に言及したリカードの文章を幾つか引用してみよう。

「劣等な土地ではより多くの労働が要求されるから，しかもわれわれが原生産物の追加供給をもつことができるのは，このような土地からのみであるから，その生産物の比較価値は依然として永続的にその以前の水準以上にあり，そしてそれはその生産にこのような追加労働量を要しない帽子，服地，短靴，等々のより多くと，交換されるであろう。[33]」（傍点，吉澤）〔尚，この文章は，§ 3(2)で既に引用したものである。〕

「原生産物と労働とを別にすれば，すべての商品の自然価格は，富と人

(32) Ricardo, D., *ibid.*, pp. 80-83.（同上，93-97頁）。

(33) Ricardo, D., *ibid.*, p. 74.（同上，87頁）。

口の増進につれて，下落する傾向をもっている，というのは，これらの物の実質価値は，一方では，それをつくる原材料の自然価格の騰貴によって，ひき上げられはするけれども，このことは，機械の改良，分業および労働配分の改善，また生産者の科学および技術の両面における熟練の増進によって，相殺されてなお余りがあるからである。[34]」（傍点，吉澤）

「社会の進歩とともに，製造品はつねに下落し，原生産物はつねに騰貴することから，ついにはこれらの物の相対価値に非常な不均衡が生みだされるので，富んだ国々では，労働者は，彼の食物のごく少量だけを犠牲にすることによって，彼の他のすべての欲望を豊かにまかなうことができるようになる。[35]」（傍点，吉澤）

リカードは，また，需要に関しても，農産物と製造業生産物の間に差異を認めているように見える。

「仮にパンの自然価格が，農学上のある大発見のために，五〇パーセント下落するとしても，誰も自分の欲望を満たす以上には欲求しないであろうから，需要が大いに増加することはないであろう，そして需要が増加しないであろうから，供給もまた増加しないであろう[36]」（傍点，吉澤）

「私はアダム・スミスの次のような所見の真実性に，以前も現在も，深く印象づけられているからである，すなわち，『食物にたいする欲求は，誰のばあいも，人間の胃の狭い容量によって制限されているが，しかし建物，衣服，馬車および家具のような便宜品や装飾品にたいする欲求には，なんらの制限もなければ一定の限界もないように思われる。[37]』」（傍

(34) Ricardo, D., *ibid.*, pp. 93-94.（同上，110頁）。
(35) Ricardo, D., *ibid.*, p. 97.（同上，114頁）。
(36) Ricardo, D., *ibid.*, p. 385.（同上，442頁）。
(37) Ricardo, D., *ibid.*, p. 387.（同上，445頁）。

点，吉澤）

以上のように，農業と製造業に対するリカードのとらえ方には差異が認められる。とはいえ，リカードは製造業については本格的に論じていないのであるから，断片的な文章から余り多くのことを読み取ろう，とすることは慎しまねばならない。

Ⅳ　経済学とは何か？

§10　リカード・モデルとその前提

リカードの価値理論と分配理論を評価する，という作業に取りかかることにしよう。ブローグは次のように述べている。

「厳格な理論家としては，リカードの方が明らかにアダム・スミスよりもすぐれていた。他方『国富論』は，経済体制の働きについての実際に価値のある一般化という方面では，リカードの『原理』よりも多くのものを含んでいる。…（中略）…もしも経済学の問題**なるもの**が，無制限に競合する諸目的の間にかぎられた手段を配分することであるならば，その場合にはアダム・スミスがリカード以上に経済学に多くの貢献をしたことになる…（中略）…またもしも経済学の問題**なるもの**が，ときとしていわれるように成長と発展であれば，ここでもリカード以上にスミスの方により多くのものが存在する。しかももしも経済学が本質的に分析の武器であり，一群の実際に価値のある諸結果であるよりもむしろ思考の方法であるとすれば，リカードは文字どおり経済学の技術的手法を発明したといえる。…（中略）…大胆な抽象に対するかれの天分は，その範囲と実際的意味とから判断して，経済理論の全史中でもっとも印象的なモデルの一つを生みだした。すなわち，ほんの少数の戦略変数を含む単純な分析的モデルでもって広範囲にわたる顕著な問題をしっかり捕えながら，かれは政策行動に指向された劇的な結論を生みだしたのであ

る。[38]」（傍点，吉澤）

彼の「単純な分析的モデル」で論じられているのは，人口と資本が増加するという条件の下での，地代・賃金・利潤の相対的シェアの変化である。

しかし，彼のモデルは，非常に厳しい前提条件が設けられた時に初めて，作動するのである。特に次の3つの条件が重要である。

1. 実質賃金の上昇は，直ちに，人口増加のメカニズムを作動せしめ，賃金は，すぐに自然価格の水準にもどる。(the Mark I version of Malthus's population mechanism)
2. 農業での技術革新は起らない。或いは，農業での技術革新は，劣等地耕作に由来する農業での収穫逓減傾向を覆(くつがえ)し得ない。
3. 人々の消費パターンは不変である。

1. の仮定も2. の仮定も，その後の歴史に照らし合わせてみれば，許し難い仮定である，と言えよう。産児制限と農業技術の著しい改善は，リカード体系の土台を爆破してしまうに十分なものであった，と言わねばならない。

3. については，少々説明が必要であろう。節を改めて論ずることにしよう。

§11　消費パターンの変化と中心点の移動

仮に，リカード流の人口理論を受け入れ，更に，農業では技術革新が全く起らない，という仮定を受け入れたとしても，尚，農業部門と製造業部門の間に比重の変化が起る，という可能性は排除できないのである。

---

(38) Blaug, M.: *Economic Theory in Retrospect,* 3rd ed., Cambridge U. P., Cambridge 1978, pp. 140-141.（久保芳和・真実一男訳『新版・経済理論の歴史 I』，東洋経済新報社，昭和57年，218-219頁）。

§9で指摘したように，リカードは，製造業での生産は収穫一定もしくは収穫逓増という条件の下で拡張可能である，と考えているようである。しかも，農産物需要の伸びには限界があるのに，製造業生産物需要の伸びには限界がない，と考えられてもいる。一方の農産物は収穫逓減の故にその相対価値が上昇し，しかもその需要の伸びに限界があるのに対し，他方の，製造業生産物の相対価値は低下し，しかもその需要の伸びに限界がないとすれば，多くの人が農産物の消費を減らし，製造業生産物の消費をふやす，ということが起るのではないだろうか？そうなると，農業部門の比重は下り，農業中心モデルの妥当性か問われることとなろう。

なぜ，農業中心の経済モデルに固執しなければならないのか？

それにはそれ相当の理由があるのである。

§6の，パン・穀物・コンピューターの3部門モデルを想起していただきたい。もし，リカード・モデルの前提を受け入れて，「農業での収穫逓減が一般的利潤率の低下をもたらす」という命題を出発点とするならば，そこから次の如きプロセスが生じてくる可能性が非常に大きい。

農業での収穫逓減→一般的利潤率の低下→コンピューターの相対価値の低下→コンピューター需要の増大→コンピューター生産の増大→平均的「固定資本－流動資本」比率の上昇→穀物部門の「固定資本－流動資本」比率＜平均的「固定資本－流動資本」比率→1.5部門モデルの基礎の崩壊

もし，消費パターンの変化を認めるならば，利潤率の低下につれて，固定資本集約的産業の比重が増大して，農業が全産業の中間にあるとする仮定が脅かされるわけである。従って，リカード体系にあっては，消費パターンの変化は，仮定によって排除されねばならないのである。

もし，リカードの方法が「帰納」に立脚したものであるならば，上記の如き議論は瑣末主義の典型であるとして，一蹴できるかもしれない。しか

し，彼の方法は「抽象」と「演繹」をその処り所とするものである。かくして，リカード体系は自己破壊的要因をその内部に蔵している，と筆者は結論づけるのである。

§12　リカード体系と自由貿易

既に§2で一度引用しておいた，『原理』序言にあるリカードの言葉を，ここにもう一度示すことにする。

「大地の生産物―すなわち，労働，機械および資本の結合充用によって，地表から得られるすべての物は，社会の三階級，すなわち，土地の所有者，その耕作に必要な資本（ストック）つまり資本（キャピタル）の所有者，およびその勤労によって土地が耕作される労働者のあいだに，分割される。

しかし，社会の異なった段階においては，地代，利潤，および賃銀という名称のもとに，これらの階級のおのおのに割り当てらるべき，大地の全生産物の割合は，本質的に異なるであろう。それは主として，土壌の現実の肥沃度，資本の蓄積と人口，また農業において使用される熟練，工夫力，および器具に依存する。

この分配を左右する法則を決定することが，経済学における主要問題である。[39]」

分配を左右する法則の探求を言いながら，それに重大な影響を与える要因，即ち，産児制限（但し，リカードの時代には，この要因は今日に於いて程には明瞭でなかったであろう），技術革新，そして消費パターンの変化といったものを，リカードが無視しているのをどう解釈すべきなのであろうか？

ブローグは，その著『リカァドウ派の経済学』で驚くべきことを述べて

(39)　Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation,* p. 5.（『経済学および課税の原理』，5頁）。

いる。

「リカァドウ体系はその本質上，経済成長の長期的な側面に関係のないことが想い起される。」[40]

更に，ブローグによれば，リカード体系というのは，穀物輸入の自由化を主張するためのひとつの脅し文句に過ぎなかった，というのである。ブローグは次のようにも述べている。

「リカァドウの具体的方法は，『理念的な静止状態』と，穀物の輸入制限によって撹乱されてきたもう一つの停滞的均衡の状態とを比較することである。両時期の間に介在する時間的経過は，短期であり厳密にいえば存在しないと考えられているので，彼は工業における収穫逓増の可能性を度外視している。同時に，収穫逓減の法則が支配的となったのは，リカァドウが短期変化に専念していたというだけでなく，農業をもって唯一の産業とする定義，すなわち，土地を生産の固定要素として用いるあらゆる企業を含むほどに広い定義，を採用していたということから説明がつく。もしリカァドウの分析が実際に長期経済成長にかかわるものであったとすれば，工業と農業における歴史的な費用低減が必然的に前面にでることになったであろう。」[41]（傍点，吉澤）

筆者は，ブローグの主張をどう解釈したらいいのか，態度を決しかねている。しかし，次の事だけは言えそうである。

人口増加率の低下，農業並びに製造業での技術革新，そして消費パター

---

(40) Blaug, M.: *Ricardian Economics—A Historical Study,* 1958, Greenwood Press, Westport 1973, pp. 70-71.（馬渡尚憲・島博保訳『リカァドウ派の経済学——歴史的研究』，木鐸社，昭和56年，116頁）。

(41) Blaug, M., *ibid.,* p. 32.（同上，53頁）。

ンの変化（即ち，農業部門の比重低下）―こういった事実を前にした時，リカード流の論法で自由貿易を説く者はいないであろう。そして，実際に，リカード経済学は捨てられたのである。

だとすれば，リカード経済学とは一体何だったのであろうか？